

情報感度を研ぎ澄ます! —— ビジネス情報誌 EL NEOS[ザ・ニュース]

エルネオス

新年号
2015 1
january

リバースモーゲージの落とし穴／悪い円安とアジア外資／新日鉄住金vs神鋼／出版業界
「永続敗戦論」を語る／朝鮮開国と日清戦争／シェールガス幻想／安倍政権と大企業



早期退職して新事業へ

二〇一四年三月、齋藤真衡さんは大手損害保険会社を引退した。最後は関連生命保険会社の取締役まで務めたが、五十五歳での早期退職を選んだのには、理由があった。

「第一は、長年保険をやって感じていたことが、保険は非常に高額な商品であるにもかかわらず、そのショッピングはあまり面白いものではないです。保険の加入の要否あるいは保険の選択に本当に必要な情報が身近に少ないからです。今はショッピングやネットで情報は入手しやすくなりましたが、それはあくまでも加入する前提における選択肢です。要否についての情報は保険の販売サイドは提供しません。そこで、保険に加入する消費者にリスクに対する心理的なバイアスと統計的なデータを提供して選択を楽しめるようにできないかと思ったのです。

もう一つは、超高齢化と一人様の増加等による社会環境の変化で、保険金をお金で届けるだけではお役に立てないケースが増えています。三・一一の震災で二百人以上が孤児になったといいますが、両親共に亡くした場合は、保険金の受取人がいなくなってしまう、せっかくの保険も加入した両親の意図通りに活用できない場合もあります。また、お一人様は保険金の受取人にも困っています。このような問題を解決するために保険金をお

金としてではなく、サービスに変換して提供する仕組みを、保険金信託の普及を通じてお手伝いできないかと考えていたのです」

つまり今、保険会社が関与していない保険に加入する前と保険金を受け取った後のサポートをしようということである。また、サービスはスタートしていないが、保険会社を離れて、自由な立場で発想を新たにするなど、準備中である。

構想を実現する上で、読書は重要なパートナーとなるといふ。保険会社時代、大きな影響を受けたビクター・バーンスタインの「リスクー神々への反逆（日本経済新聞社）」が映画や読書のベースになっている。

そんな齋藤さんの最近の読み応え本を紹介してもらおう。

人間の選択は直感

ダニエル・カーネマン、村井章子・訳『フアスト&スロー あなたの意思はどのように決まるか？（上下）』（ハヤカワ・ノンフィクション文庫）——「かなり売れた本です。著者は心理学者にして、ノーベル経済学賞をとった人で、直感と統計をシステム1、システム2と呼んで人間の選択について分析しています。人間は全く合理的ではないと言っています。長く狩猟採集生活をしてきた人間は、経験値として持っている直感（システム1）によって、危険を回避してきました。むしろ

私の読書スタイル

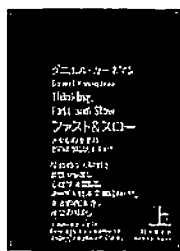
株式会社 回(KAI)
代表取締役

齋藤真衡氏 (H)



保険の新サービスを模索 読書が重要なパートナー

意識的な判断（システム2）による選択は一手あるうちの十ぐらいしかないと書かれています。プロスペクト理論と損失回避性が面白かったですね。ベルスローイの期待効用論に参照点という変化の概念を導入し、人間が参照点に対する利得よりも損失を一・五倍から二・五倍も強く感じるということです。保険に当てはめてみると、その期待値は当然のことながら、払った額以上には受け取れないわけですが、それでも、ほとんどの人が加入する理由がよく分かります。カーネマンの言うとおり、人間は失うことを恐れる傾向が非常に



強いためなのでしょう」

マイケル・ルイス、中山宥・訳『マネー・ボール』(武田ランダムハウスジャパン)——
「映画にもなっていますが、判断を統計のみで行った野球チームの話です。弱小球団のアスレチックスのGM、ピリー・ビーンがハーバード大学で数学を学んだ人間を連れてきて、これまでの選手の評価基準の打率、打点などを調べるとほとんどチームの勝利に結びついていないことが判明し、新たな指標として出塁率を重視したチームづくりをして成功しました。本書を読むと、面倒なデータの調査にも意欲が湧きます」

迷ったらやってみる

ダニエル・ギルバート、熊谷淳子・訳『幸せはいつもちょっと先にある—期待と妄想の心理学』(早川書房)——「人間が判断する時の心理を解き明かしています。まず認知、認識して、それをどう解釈するかが非常に大きな問題です。人間は今も将来も失うことがいやなので変化することを悲観的に捉えるけれども、実は将来になってみるとその時の現状を常に合理化する習性があることを解き明かしています。迷ったらやらないう人が多くありますが、彼はやらないう人が多くありませんが、彼はやらないうと経験値が高まらないし、やってみないと結果は分からない。だから、やるべきというロジックを展開しています」

シーナ・アイエンガー、櫻井祐子・訳『選択の科学』(文藝春秋)——「著者は「ファスト&スロー」と同じように選択をアートと言いますが、必ずしも選択することが好ましいことではないと分析しています。例えば、自分の病気の治療法が二つあり、どちらかを選べと言われても、多くの患者は医師に任せます。自分では選択できないことも多いのです。人に選択を任すことも一つの選択なのです」

ティモシー・ウィルソン、村田光二・訳『自分を知り、自分を変える—適応的無意識の心理学』(新曜社)——「適応的無意識という概念を掘り下げています。カーネマンのシステム1を、狩猟採集生活時代の数億年の人類の歴史で育まれた経験値から具体的に説明しています。われわれの体には一秒間に一千百ぐらいの信号が入ってきているらしいのです。それを視覚や聴覚、嗅覚などで捉えて、われわれの体を無意識で動かしています。たしかに心臓は寝ている間も無意識で動いているわけですが、これは、むしろ、無意識に任せたい方がいい場合があるということなのです。意識はすべてを言葉に置き換えないといけないので限界があります。例えば、ひらめきは、無意識に考えていることがだんだんまとまっていくなことではないか。無意識にはアクセスできないのですが、私は散歩して外の空気を吸ったり、読書して活字のシャワーを浴びたりして刺激を与えて、無意識が反応する環境

を意図的に用意しています」

リチャード・ドーキンス、日高敏隆・他・訳『利己的な遺伝子(増補新装版)』(紀伊國屋書店)——「ドーキンスは人間が死んで遺すものとして、生物的な遺伝子としての子供に加えて知的な遺伝子であるミームを創造しました。ミームは模倣とも言われますが、もっとも社会的動物と言われる人間らしいものです。その上に新たな発見などを積み重ねることが出来る。人間であれば、誰もが何かを遺すことができるのです」

チェーン読書家だ。一冊読むと三冊読みたくなる。本のしりとりみたいなものだと言う。退職して以降、蔵書数が多い出身大学の図書館を効果的に利用している。現役の時には出入りしなかった大学の図書館は今ではお気に入りの場所となっているようだ。

●齋藤真衡さんの最近の読み応え本●
「ファスト&スロー あなたの意思はどのように決まるか? (上下)」ダニエル・カーネマン、村井章子・訳/ハヤカワ・ノンフィクション文庫
「マネー・ボール」マイケル・ルイス、中山宥・訳/武田ランダムハウスジャパン
「幸せはいつもちょっと先にある—期待と妄想の心理学」ダニエル・ギルバート、熊谷淳子・訳/早川書房
「選択の科学」シーナ・アイエンガー、櫻井祐子・訳/文藝春秋
「自分を知り、自分を変える—適応的無意識の心理学」ティモシー・ウィルソン、村田光二・訳/新曜社
「利己的な遺伝子(増補新装版)」リチャード・ドーキンス、日高敏隆・他・訳/紀伊國屋書店

